



希望

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」、出典は中国の古典、劉延芝の「代悲白頭翁」、白髪の子となつて人の世のはかなさを謳つた名詩の一説である。

喜寿を迎えようとしている筆者としては、甚だ共感を覚える言葉だが、反面、人間の可能性を信じて積極的な解釈をすれば、「人間は年毎に成長を遂げ、歳々年々、決して同じ姿を見せるものではない」と解することもできる。

現に、アメリカの実業家として大成功したサミュエル・ウルマンの80歳の誕生祝いの「青春」と題する詩の中には、「青春とは、人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ、年を重ねただけでは人は老いない。希望ある限り、若く、失望と共に老朽ちる」という有名なフレーズがある。

警察庁も都道府県警察も誕生以来、本年で54年の歳月を閲した。

その間、庁舎も整備され、警察官の処遇も飛躍的に向上し、法令上の権限も、装備も、組織体制も、昭和29年の創設当初と比べれば、かなり整備されるにいたっている。

しかし、安定した組織の中に安住すれば、人はマンネリに陥り活気を失ってくる。

その上、最近では情報公開と内部通報を過度に意識するあまり、内向きになり積極的な活動に欠けるきらいなしとしない。

「警察は老いてはならない」

古来から「創業は易く守成は難し」(唐書)といわれているが、昭和29年6月当時402を数えた市町村自治体警察の非能率、不経済を打開するために、都道府県警察への一元化を果たした警察法の制定は、その後の警察の運営に大きな影響をもたらし、昭和50年代には世界最高の治安を謳歌した。

その組織を効果的に維持して「守成」を達成するためには、将来への若々しい「希望」がなければならない。

特に、本年の警察を取り巻く環境には、6月の洞爺湖サミットの警備をはじめ、アルカイダ・テロの脅威、北朝鮮の核ミサイルの脅威、中国の軍事力の増強、更には米国のサブプライム問題に端を発した世界経済の停滞の我が国経済への影響、とりわけ犯罪の遠因となるニート、フリーター、ワーキングプアなどの貧困層や生活保護者の増加、未だ終息しない少年犯罪の凶悪粗暴化、外国人犯罪、特に不法滞在者の矯正の問題、そして取り調べの可視化など、数々の難問が山積している。

最近では、第一線警察官の努力と多くのボランティアグループによる防犯パトロール活動などにより、刑法犯の年間認知件数はやや減少してきてはいるが、昭和期の160万件に比べれば、まだ200万件を数えて、強盗の増加や異常な犯罪の発生は体感治安の悪さを物語っている。

これらの困難な課題を解決し、前進を図っていくためには、過去幾多の困難を克服してきた日本警察の伝統に「誇り」を持って、さまざまな対処方策について「温故知新」の努力を尽くし、情熱を持って各種の「作戦」を展開していくことが肝要である。

この場合、かつて多発した不祥事案の対策として定められた公務員倫理法による過剰規制とも思われる倫理基準によって、警察官をはじめとする公務員の人間としての「交際」について極めて不自然な制約が課せられていることが大きな問題であると思う。

例えば、警察庁の職員が都道府県警察に出張した際に、公用車の使用が禁止され、更には関係県警察職員との飲食が「予算を配賦している利害関係者」であるとの理由で敢えて行われなくなってきたなどの実態は、本来一体となって活動すべき間柄の人々の士気を低下させ、いたづらに警察活動の効率化を妨げている。

そのことは、また、いわゆる「裏金」の廃絶により、それに見合う「表金」の確保がな

されていないことと併せて、第一線の刑事や地域の警察官にあつてはもとより、本部長、警察署長などの幹部にいたるまで、地域住民などの関係者との間に必要な人間的交際が怠られがちになるという結果を生じている。

そのため、本部長や警察署長などの幹部には官舎などへの「引きこもり現象」が見受けられ、それが定着すれば、警察活動において最も大切な地域住民からの協力が得られなくなることも覚悟しなければなるまい。

もともと県民のための警察が、県民との交際を欠くようでは本末転倒も甚だしい。

本年は、折しも、長い間世界最高の治安を支えてこられた団塊世代の大量退職を迎え、多くの若い新人が治安の戦いの現場に登場してくる年となる。

新年に当たり、若い警察官諸子をはじめ、全国の警察職員が「希望」に溢れた青春のエネルギーを発揮して、組織の錆を落とし、一致団結して困難な課題を一つ一つ克服していくことを強く期待したい。

先人は、「憂きことのなおこの上に積もれかし、限りある身の力試さん」（山中鹿之介）と言挙げした。

再び言う。「警察は老いてはならない」。

警察に「希望」ある限り、我が国の治安は永遠に全きを得ることができるのである。